はじめに――「食」から広がる学びのカタチ

コロナ禍に覆われた世界の中で、学生たちとの学びをどのように続けていけば良いのか、こんなにも悩み続ける日々を送るとは、いったい誰が想像したでしょうか。オンラインという道具は手に入れたものの、いつの間にかこぼれ落ちていくものがあることに戸惑いつつも、試行錯誤する日々が続いています。身近な経験の中では、教室での学びや配布プリントがなくなり、それとともに学びの場から雑談やあそび、そしてゆったりとした余白が少しずつ消えていくように感じました。

「食べもの」や「食べること」、そして「胃袋」から歴史や社会を考えよう、というテーマが多い私の講義では、以前なら実際の食べものを教室に持っていき、学生たちとそれに触れ、香りを楽しみ、時には休み時間に食べながら話すこともありました。

たとえば、熊本県水俣市の甘夏生産の話をする時には、その甘夏で作ったジャムを持って行ったり、労働者の胃袋から社会を考える時には愛媛県松山市の「労研饅頭」を取り寄せて、

当時の資料と合わせながら味わったり、といった具合です。そんな時、教室は「創造的な雑談」で満たされます。食べものを囲むと、それだけで何だか話がはずむので、楽しかったですね。しかし、もうしばらくは、そういった講義はできないでしょう。文字通り「味気ない」と感じます。

でも逆に、こんな時だからこそと言うべきか、不自由に感じられたこの数年の中で、学びの場をどんなふうに創り出し、デザインしていけば良いのか、これほど真剣に考えたことはなかったとも感じています。その中で、新しい発見や工夫も手に入れました。その1つがオンラインでも対面でも、双方向のやりとりをする実感を味わえる「ワークショップ」を積極的に取り入れることです。ワークショップを始めてみると、乾いた地面にようやく雨が降って、花木がそれをどんどん吸収するように、学生たちの表情は生き生きとし始めました。学び合うとは、本来こういうことだったのだと、今更ながら気づくことも多かったのです。写真はようやく対面ができるようになった秋学期のある日に、ワークショップに取り組む学生たちの姿です（図0―1）。

そしてこのコロナ禍ではもう1つ、はっきりとした変化がありました。それは、当たり前

図 0-1　私が教える大学で「ノイズをさがせ」ワークショップに取り組む学生たち
校内を歩いて見つけたノイズ（違和感や驚き）をグループで画用紙に表現していく

のように見えていたささやかな「日常の暮らし」が、じつはとても得難いものであるということや、「日々食べること」の世界が思っていた以上に奥深いものであると気づかされる機会が増えたということです。これまでほとんど省みられることのなかった膨大な「日常」という世界に向き合わざるを得なくなった時、その煩わしさだけではなく、魅力を見つけた人もいたことでしょう。また、これまで以上に日常の暮らしを慈しむようになった人も少なくなかったようです。

とするならば、「食べもの」や「食べること」という「日常」を通して歴史や

社会を考えてみる、もっと言えば、今生きている世界や自分自身を知る、そして考える、という学びのカタチは、きっとこれからいろいろなところで試行錯誤されながら磨かれていくのではないでしょうか。

多様であるほどに面白く、立体的で奥行きのある「食の学び」が求められるようになるのだと思います。そこにはあそびや余白がたっぷりあるといいな、と思います。あそび（余裕）があれば、ちょっと寄り道をした先に、思いがけない発見があるかもしれません。余白があれば、そこを「のりしろ」にして、いろいろな意見をつなぎ合わせることもできるでしょう。そうした学びが集まるプラットホームのようなものを創り、小学校、中学校、高等学校、大学、市民セミナーなどでの彩り豊かな学びのカタチを分かち合えたら……。今は、そんなことを考えているところです。

そこでこの本では、私がこれまで試みてきたワークショップを、「食」から広がる学びのカタチとして紹介してみようと思います。いつかお会いできたら、ぜひ、あなたの試みも教えてください。この本を手に取ってくださった縁をつないで、「食の学びとあそび」について考えるタネを播き、あちこちの畑でその芽をのびのびと育てていけたらと思っています。

目次

はじめに——「食」から広がる学びのカタチ……03

［1時間目］

「胃袋」ってなんだろう？「食べもの」ってなんだろう？

1.「食べものがたり」とは何か

★自分の歴史を語るなんて、ムリムリ！ 14　★Tシャツに描かれたイラストは、旅の入口 17

★「食べものがたり」を集める「フード・ストーリー・バンク」 19

2.「胃袋」について考えるワークショップ

★シンプルな問いから始める 21　★胃袋は「私」のもの？「社会」のもの？ 23

3.「食べもの」について考えるワークショップ

★食べものから得ているものは？ 26　★あなたにとっての「食べもの」を位置付ける 29

★文化・社会が交じり合う豊かな世界 31　★世代で異なる「食べもの」の意味 32

★お皿に盛り付けるもの 35

1．「食べものがたり」とは何か

★自分の歴史を語るなんて、ムリムリ！

それではまず手始めに、この本のテーマである「食べものがたり」とは何か、ということについてお話ししていくことにしましょう。

ここは、とある学校のとある教室。そろそろ講義が始まります。

キーンコーンカーンコーン。先生らしき人が教室の後ろのドアから入ってきました。学生とおしゃべりするために、いつもきまって後ろの扉を入口にしているのです。変わったTシャツを着ています。黒板の前に到着すると、教室全体をゆっくり見まわしてこう言いました。

「では授業を始めましょう。今日はみんなに、自分の歴史を語ってもらいます」

静かだった教室は、一斉にざわめき始めます。

「それって、どういうこと？」

「えー。ムリムリ。自分のことで歴史を語るなんてできっこないよ。だって、歴史はそんな身近なところにはないワケだし」

「歴史って、社会科とか、日本史とかで習うものでしょ。自分の歴史って言われてもなぁ」

先生らしき人が、お構いなしにこう言います。

「身近なところに、たくさんありますよ。なんとも味わい深い歴史がね」

＊＊

はじめまして。わたしはこの本の案内人、湯澤規子です。

とある教室の「先生らしき人」とは私のことです。私は大学で教員をしていますが、いつもの講義は、だいたいこんな感じで始まります。

「自分の歴史」と言うと、決まって学生たちはまず、「はて？」と不思議がる表情をし、次に「いやいや、ムリでしょ、それは」と言ったりします。こうなればもう、新しい研究に一歩踏み込んだのも同然です。当たり前だと思っていた常識が揺らぐ、それを疑ってみる、さらに壊してみる、そしてついに自分自身の考えやモノの見方を手に入れるというのは、研究のプロ

セスそのものだからです。

変わったTシャツを着ているというところが気になりますか？

そうですね、この日は、誰もがどんな時でも肌身離さず持っている、食べるためには必要な「あるもの」にまつわる歴史について話したかったので、それが描かれたTシャツを着ていました。あるもの、とはなんでしょうか。そう「胃袋」です。この日は「胃袋に歴史あり」という話をするために、まん中に胃袋が描かれたTシャツを選びました。

図 1-1　江戸川区子ども未来館での食べものをテーマにしたワークショップの様子

その日のテーマ「ドーナツ」をTシャツに描いてもらったら、参加した小学生たちが大盛り上がり！

余談ですが（余談はあそびとしてとても大切！）、講義のテーマにちなんだTシャツを選んで着るのが私の趣味で、他にも「焼き芋」「ぶどう」「ワイン」「トンカツ定食」「野菜」「ポテトチップス」「バナナ」「ウンコ」などのTシャツを持っています。ピッタリの絵のTシャツが無くても大丈夫。その時はマジックで直接描いていきます。このまえは、小学生たちのワークショップで、背中いっぱいにドーナツを書いてもらいました（図1―1）。

教室にいる学生たちはいたってクールですが、教室に入ってくる私のTシャツをチラッと見て、きっと心の中では「今回は何の話だろう」と思いを巡らせてワクワクしているに違いありません。

★Tシャツに描かれたイラストは、旅の入口

ところで、これらのTシャツのイラストに共通するテーマは何だかわかりますか？

そう、「食べること」（と「出すこと」）ですね。

大学で担当している「地域経済論」や「食と農の環境学」という講義を、私は常々、次のような場にしたいと考えています。

「身近な問いを発見し、五感を使って考える旅の入口」

何と言っても「旅の入口」というのがポイントです。研究や学問は旅のようなものです。旅に出るか出ないかは本人次第。講義はその入口に過ぎません。たくさんの入口があって、その先には文字通り「未知」の世界が広がっています。講義では、その入口までは案内しますよ、というのが私のスタンスです。気が向けば、そこからあなたは自分の力で学びの旅に出掛けることができます。

最近では、旅にいざなう仕掛けとして、「食べること」をテーマの中心に置くことが多くなりました。生きとし生けるものは食べずしては生きられません。ということは、あなたも私も、そして教室にいる誰もが「食べる」という経験をしているので、「食べる」ことについてなら、多かれ少なかれ、自分自身の言葉で話すことができるはずだからです。

身近なところにある「味わい深い歴史」「胃袋に歴史あり」とは、つまり、そういうことです。

たとえば、いくつか簡単な質問を並べてみましょう。

Q　あなたの好きな食べもの、嫌いな食べものは何でしょう？
Q　それを好きになったり、嫌いになったワケは？　きっかけは？
Q　忘れられない「味」や「食べもの」がありますか？

こうした問いのいくつかに刺激されて、あなたも「そう言えば……」と、思い出したことがあるはずです。どんな些細（ささい）なことでもいいのです。そう考えてみると、「食べもの」や「食べること」、あるいは「食べられなかったこと」には、人生の数だけ、その人にしか語ることのできない、数多（あまた）の物語があると言えそうです。

★「食べものがたり」を集める「フード・ストーリー・バンク」

けれども、その物語はとりたてて語られることもなければ、記録されることもなく、ゆえに、これまで共有されることも、ほとんどありませんでした。当たり前すぎて、誰かに伝えたり、

記録するには値しないという思い込みがあったからです。でも、そうした日常の生活世界の物語の数々は、じつはとても魅力的で、目を凝らせばあなたの周りにたくさんあり、累々と積み重なっています。

私はこれを「食べものがたり」と呼ぶことにしました。

食べものを集めてみんなで共有する「フードバンク」という仕組みがあります。私は「食べもの」だけでなく、それにまつわるさまざまな物語、つまり「食べものがたり」を集める「フード・ストーリー・バンク」という仕組みをいつか創ってみたいと考えています。物語を集めるので、「食べものがたり文庫」みたいなものも、できるかもしれません。

「食べもの」と「物語」が重なる「食べものがたり」がいざなう旅は、とても面白く、魅力的です。面白いだけではありません、食べものがたりを通して相手を深く理解したり、世界の仕組みやひずみに気がついたり、未来への課題を見つけたりすることもできるのです。

2.「胃袋」について考えるワークショップ

★シンプルな問いから始める

「食べること」に関わる話をする時、私はいつも、最初にシンプルな2つの問いかけから始めることにしています。それを「胃袋」と「食べもの」について考える2つのワークショップにして、まずはみんなでワイワイと話します。リラックスして参加できるようになる、気持ちをほぐす準備体操のようなものですね。

ワークショップで使うのは、紙皿、付箋、ペンの3つです。今は、100円均一ショップなどに、食べものの形をした可愛い付箋が色々ありますので、それをいくつか用意して、紙皿に食べものをいくつか貼り付けておきます。ワークショップが始まる前に、そのお皿を参加者一人ひとりの前に並べておくと、まるで食事のお皿が並んだ食堂のようになり、教室に入ってきた時から何やら楽しそうな雰囲気になるのでおすすめです（図1―2）。